様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月　 ３ 日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２６４７

研究課題名（和文）日本語を中心とした比較統語論に基づくラベリングの研究

研究課題名（英文）Research on labeling on the basis of comparative syntax of Japanese

研究代表者
斎藤　衛（SAITO, MAMORU）

南山大学・国際教養学部・教授

研究者番号：７０１８６９６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　極小主義統語論において、ラベル付けは、名詞句の分布や移動の性質を説明し、理論の根幹をなす。この理論では、ラベル付けにおいて、一致が重要な役割を果たすことから、日本語のような一致を欠く言語においてどのようにラベル付けがなされるのかという問いが生じる。本研究では、日本語におけるラベル付けを検討し、文法格と述部屈折が弱主要部であるとする仮説を提示して、日本語の類型的特徴である多重主語、自由語順、項省略、語彙的複合動詞、そして連体修飾節と遊離数量詞の広範な分布に説明を与えた。また、この提案の帰結として、theta 規準の効果と日本語で観察される例外が、ともにラベル付けにより説明されることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　Chomsky (2013) の極小主義統語論は、二つの要素 a, b から構成素 g = {a, b} を形成する併合と g の性質を決定するラベル付けという二つの普遍的操作から成る。この限られた枠組みの中で、言語間変異を説明することが、現在の比較統語論の重要な研究テーマである。本研究は、日本語の主要な文法的特徴を普遍的なラベル付けのメカニズムによって説明し、日本語を言語理論の中に位置付けた。また、日本語の特徴に基づいて、theta 規準の効果をラベル付けから導くことを提案しており、日本語研究に基づく一般理論への貢献も行っている。

研究成果の概要（英文）：　In Minimalist syntax, the labeling algorithm explains the distribution of noun phrases and the nature of movement. As agreement plays a crucial role in labeling analysis of English, a question arises how labeling is accomplished in languages like Japanese without agreement. I proposed a hypothesis that in Japanese, Case and predicate inflection are weak heads that do not contribute to labeling, and showed that it explains several outstanding properties of the language, including multiple subjects, free word order, argument ellipsis, and the wide distribution of prenominal sentential modifiers. One of the theoretical consequences of this analysis is the elimination of the theta-criterion. I demonstrated that the effects of the criterion as well as the counter-examples observed in Japanese are explained by the labeling theory, which makes the criterion redundant.

研究分野：統語論

キーワード：比較統語論　併合　ラベル付け　フェイズ　転送領域　移動現象　照応形束縛　文法格

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

言語に最低限必要な操作として、以下のように二要素から構成素を形成する「併合」がある。

(1)　$\alpha, \beta \rightarrow \gamma = \{\alpha, \beta\}$

極小主義アプローチでは、これが唯一の句構造形成メカニズムであると仮定される。併合はいかなる要素にも適用しうるものであり、したがって、それ自体は極端な過剰生成を伴う。しかし、生成される不適格な表現は、多くの場合、意味的／形態的選択制限や意味／音声とのインタフェイスにおいて排除される。

同時に、統語的説明を要する言語間変異があることも明らかにされてきた。例えば、Hale (1980), Kuroda (1988), Fukui (1988) などでは、日本語の以下の特徴が取り上げられている。

(2) a. 多重格現象 (例3)、b. 自由語順 (例4)、c. 複合述語の多用、d. 空項の広範な分布

(3)　文明国が男性が平均寿命が短い。(Kuno 1973)

(4)　太郎がその本を読んだ。／その本を太郎が読んだ。

英語を含む多くの言語が、(3) のような多重主格主語や (4) にみられる目的語前置 (スクランブリング) をなぜ許容しないかは、選択制限や意味的整合性の観点から説明しうるとは考えにくい。

(2) に示した日本語の統語的特徴には、新たな説明が求められるが、ここで注目されるのが、Chomsky (2013) のラベリング・アルゴリズムである。併合は、(1) で示したように、二つの要素から構成素を形成するが、同時に形成された構成素の性質 (ラベル) を指定する必要がある。例えば、動詞と名詞を含む構成素は、それが動詞句であるか名詞句であるかにより、解釈が異なる。Chomskyは、主要部と句の併合 (例えば、{V, NP}) を標準的なケースとして、構成素は主要部の性質を引き継ぐとする。また、句と句の併合 ($\{\alpha P, \beta P\}$) も存在することを指摘し、その場合に、いかに構成素の性質が決定されるかを追求する。一つの例としては、従来、主語の TP 指定部への移動とされてきた主語と TP の併合がある。Chomsky は、主語－時制の一致により、主語 NP とTPのラベルは ϕ 素性を共有しており、形成された構成素は、この素性共有によりラベルを与えられるとする。さらに、Chomsky (2015) では、統語的な言語間変異の典型的な例とされてきた EPP 現象や ECP 現象に、ラベリングに基づく説明を与えることが試みられている。この背景をふまえれば、(2) に示した日本語の統語的特徴に対しても、ラベリングに関するパラメターを基礎とした説明を追求することが考えられる。これが本研究の基本的な目的である。

２．研究の目的

本研究は、代表者が 2013 年に発表した論文 「日本語を特徴付けるパラメター再考」(村杉恵子編『言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：領域指定型プロジェクト成果報告書 II』国立国語研究所/南山大学, 1-30) において提示した作業仮説を追求しつつ、遂行する。作業仮説は、Kuroda (1988) の考察を発展させ、日本語のような ϕ 素性一致を欠く言語では、ϕ 素性一致に代わって、接辞文法格および連用、連体等の述部屈折が $\{\alpha P, \beta P\}$ のラベリングを可能にするとするものである。具体例としては、(5) において、格を伴う αP は不可視的になり、結果として γ は βP の性質を引き継ぐことを提案する。

(5)　$\gamma = \{\alpha P\text{-格}, \beta P\}$

この仮説の帰結として、多重主語文 (6)、スクランブリング文 (7) のラベリングが可能となる。

(6)　{NPが, {NPが, TP}}

(7)　{NPを, TP}

英語では、文法格がこのような機能を有しないため、いずれも許容されない。

本研究では、この作業仮説の下で、日本語の類型的特徴の体系的分析を行う。日本語文法の特徴としては、多重主語や自由語順に加えて、空項の広範な分布、複合述語の多用、Wh 句の項位置での解釈、多様な連体修飾節などがある。項省略と語彙的複合動詞の分析はすでに始めており、“Ellipsis” (本研究開始後に、*Handbook of Japanese Syntax* (2017), De Gruyter Mouton, 701-750 に公

表)、“Selection and Incorporation in Complex Predicate Formation” (*Chinese Syntax in a Cross-Linguistic Perspective* (2014), Oxford University Press, 251-269) などで研究成果の中間報告を行っている。本研究では、まず、これらの研究を完成させる。また、Wh 句の解釈、連体修飾節の分析にも取り組み、日本語の類型的特徴を統一的に捉えることによって、日本語文法の骨格を明確にする。

日本語の接辞文法格や述部屈折が、句をラベル付けにおいて不可視的にする機能を持つとする仮説が正しければ、接辞文法格や述部屈折がなぜこのような性質を有するのかという新たな問いが生じる。本研究では、さらにこの問いを追求して、答えを一般理論に求めることにより、日本語分析を一般理論の中に位置付け、日本語分析から一般理論への提言を行う。

３．研究の方法

海外の研究協力者と意見交換をし、必要に応じて共同研究を行いながら研究を進める。日本語の文法的特徴の分析については、他言語のデータや分析が大いに参考になる。例えば、韓国語には、日本語と共通の特徴が多くみられるが、現象の性質がより明示的である場合が多く、分析のヒントを得られることがしばしばある。項省略は、中国語、トルコ語など多くの言語で観察されるが、これらの言語では目的語に限られる。また、研究の最終的目標が、一般的な言語変異の理論を構築することにあることから、言語比較の視点は不可欠である。Dongguk University の Myung-Kwan Park 教授 (韓国語)、台湾国立清華大学の Jonah Lin 教授 (中国語)、南カリフォルニア大学の Audrey Li 教授 (中国語) に協力をお願いする。理論的課題の追求については、類型的に異なる言語の分析に基づいて同様の研究を行っているコネティカット大学の Zeljko Boskovic 教授 (スラヴ系言語)、ケンブリッジ大学の Ian Roberts 教授 (ゲルマン系言語)、シエナ大学の Luigi Rizzi 教授 (ロマンス系言語) と密接に連絡を取り合いながら、研究を進める。

４．研究成果

＜ラベル付け理論＞

Chomsky (2013) の極小主義統語論は、二つの要素 α, β から構成素 $\gamma = \{\alpha, \beta\}$ を形成する併合と γ の性質を決定するラベル付けから成る。名詞句の分布や移動の性質は、ラベル付け理論の帰結として導かれる。この理論では、例えば時制節のラベル付けにおいて、(主語と時制などの) 一致が重要な役割を果たす。ここから、日本語のような一致を欠く言語においてどのようにラベル付けがなされるのかという問いが生じる。本研究は、日本語の類型的特徴に説明を与える形で、この問いに答えることをめざす。

(1) 本研究の申請中、開始前の 2016 年に “(A) Case for labeling” (*The Linguistic Review* 33, 129-175) を公表して、日本語においては、文法格と述部屈折が、反ラベル付け機能を持つことをより具体的な形で提案し、経験的帰結として、日本語が、多重主語、自由語順、項省略、そして語彙的複合動詞を許容することに説明を与えた。研究期間を通して、研究協力者と議論を重ねつつ、この分析をより精密にしていく作業を行った。

(2) 2017 年は、この提案の理論的帰結に焦点を当てて、研究を進めた。文法は長らく規則の体系であると考えられてきたが、統語論は、Chomsky (1981) などが、規則群を説明すべき対象として提示した原理とパラメターの理論によって大きな転換を遂げる。極小主義理論は、さらに、提示された原理群に統一的な説明を与えることをめざし、成果をあげてきた。その中で、残された原理として、最も根本的な文法原理とも言える θ 規準がある。述語が項に与える意味役割はすべて単一の項に与えられ、すべての項は単一の意味役割を受けるとするものである。この原理の経験的妥当性は広く仮定されているが、一方で、Kuroda (1988) が日本語においてこの原理と矛盾する例があることを指摘していた。2017 年に発表した “Labeling and argument doubling in Japanese” *(Tsing Hua Journal of Chinese Studies* 47, 383-405) では、Kuroda の観察をより詳細かつより正確なものとして、英語等で θ 規準を遵守する例とともに日本語で観察される反例がラベル付け理論から導かれることを示し、θ 規準を文法理論から除去することを提案した。

(3) 本研究の日本語の類型的特徴に関する仮説は、日本語の文法格と述部屈折が、なぜ反ラベル付け機能を有するのかという新たな課題を提示する。2018 年は、この課題に答える "Kase as a weak head" (*McGill Working Papers in Linguistics* 25.1, 382-391) を公刊した。Chomsky (2015) は、時制文における主語の必要性 (EPP 効果) に関する言語間変異を説明するために、ラベル付けに寄与しない弱主要部があるとの仮説を提示した。"Kase as a weak head" は、この提案を修正を加えた上で採用し、文法格と屈折を弱主要部であると仮定することにより、その反ラベル付け機能が説明されることを論じたものである。この分析が正しければ、日本語の類型的特徴が完全に一般理論の中に位置付けられたことになり、言語間変異は、普遍的なラベル付けのメカニズムをどのように使うかにより生じることが示唆される。

(4) 2019 年度は、日本語の連体修飾節と遊離数量詞の広範な分布が、(1) に示した仮説から導かれることを論じ、「弱主要部と言語類型論」(2020 年に刊行される『日本語研究から生成文法理論へ』(開拓社) に所収予定) と題する論文にまとめた。連体修飾節については、日本語で「ドアが閉まる音」が文法的に適格であるのに対して、英語では 'the sound that a door closes' が非文法的であるという日英語の差異が注目されており、言語類型論では、世界の言語を、日本語のように文による名詞修飾を広く許容する言語と英語のように制限的である言語に分類する研究が盛んに行われている。上記論文では、日本語の例は適切にラベル付けがされており、英語の例はラベルが付与されないために非文法的であることを示し、さらに、英語でも、'the sound of a door closing' のようにラベル付けがなされる場合には許容されることを論じた。ラベル付け理論の説明する範囲を拡大するだけでなく、言語類型研究に一石を投じる内容となっている。

＜関連する研究＞

句構造生成は、併合とそれに付随するラベル付けによってなされる。一方、形成された構造を解釈部門 (意味および音声部門) に送る操作としては、「転送」が仮定されており、種々の局所性は、転送のメカニズムに起因すると考えられている。本研究では、日英語間に見られる局所性の相違に注目しつつ、転送の理論も追求した。また、具体的な意味解釈については、Wh 句の解釈における言語間変異も主要な研究課題であり、日中語比較を軸とした研究を遂行した。以下にその概要を示す。

(1) Chomsky (2000, 2008) では、構造の派生がフェイズ (CP および *v**P) を単位としてなされ、フェイズが完成した時点で、その補部 (TP および VP) が解釈部門に転送されるとの提案がなされている。この理論により、一致や移動の局所性が導かれる。Quicoli (2008) などは、照応形束縛の局所性も、フェイズと転送の理論により説明することを提案している。本研究の成果として 2017 年に出版した論文 "Notes on the locality of anaphor binding and A-movement" (*English Linguistics* 34, 1-33) では、日本語における NIC 効果の欠如に注目して、フェイズと転送の理論を大きく修正することを提案した。NIC 効果であるが、英語では 'John insisted that himself should go there' が文法的に不適格であるのに対して、日本語の「太郎は自分自身がそこに行くべきだと主張した」は許容される。上記論文は、この相違が一致の有無に起因することを示した上で、フェイズを一致に言及する形で定義し直すことにより、具体的な分析を提示する。さらに、新たなフェイズの定義が、例外的格付与文や非対格文の分析に関する問題の解決を可能にすることを論じる。

(2) 例えば英語では、Wh 句が 'What did you buy?' にように文頭に移動する。この場合には、Wh 句が移動先で演算子 (For which x: x a thing)、元々の項の位置で変項 (x) として解釈されるものと考えられる。一方で、中国語や日本語では、Wh 句が項の位置に留まる。これについては、Tsai (1999) が、中国語の Wh 句が項の位置で変項として解釈されることを提案して、数々の証拠を提示しており、日本語の Wh 句も同様に分析されることが広く仮定されている。本研究では、Wh 句の日中語比較を行い、Wh 句の示すパターンが二言語間で大きく異なることを明らかにした。また、この記述的研究に基づき、日本語の Wh 句は演算子として解釈されるとする分析に至っ

た。この成果は、2017 年の論文 “Japanese Wh-phrases as operators with unspecified quantificational force” (*Language and Linguistics* 18.1, 1-25) として公表した。

以上

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Bocci, Giuliano, Luigi Rizzi, and Mamoru Saito	４．巻 154
２．論文標題 On the Incompatibility of Wh and Focus (慫慂論文)	５．発行年 2018年
３．雑誌名 言語研究	６．最初と最後の頁 29-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） doi: 10.11435/gengo.154.0_29	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Saito, Mamoru	４．巻 25.1
２．論文標題 Kase as a Weak Head	５．発行年 2018年
３．雑誌名 McGill Working Papers in Linguistics (Special Issue in Honour of Lisa Travis)	６．最初と最後の頁 382-391
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Mamoru Saito	４．巻 47
２．論文標題 Labeling and Argument Doubling in Japanese	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Tsing Hua Journal of Chinese Studies	６．最初と最後の頁 383-405
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） DOI: 10.6503/THJCS.2017.47(2).07	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Mamoru Saito	４．巻 34
２．論文標題 Notes on the Locality of Anaphor Binding and A-Movement (Invited Article)	５．発行年 2017年
３．雑誌名 English Linguistics	６．最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Mamoru Saito	4．巻 18.1
2．論文標題 Japanese Wh-Phrases as Operators with Unspecified Quantificational Force (Featured Article)	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Language and Linguistics	6．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/lali.18.1.01sai	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Mamoru Saito	4．巻 12
2．論文標題 A Note on Transfer Domains	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Nanzan Linguistics	6．最初と最後の頁 61-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　7件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Saito, Mamoru
2．発表標題 Variation in Transfer Domains and the Presence/Absence of Phi-feature Agreement
3．学会等名 The 12th International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 斎藤　衛
2．発表標題 転送の単位と言語間変異ー移動と束縛における局所性をめぐって
3．学会等名 ドイツ文法理論研究会 2019年春の大会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 斎藤　衛
２．発表標題 KP仮説下におけるラベル付けと格与値
３．学会等名 慶應言語学コロキアム（慶應義塾大学言語文化研究所）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Saito, Mamoru
２．発表標題 Search in Case Valuation: K as a Weak Head
３．学会等名 Workshop on Case Theory and Labeling of Structures (U. of Tokyo, Komaba)（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mamoru Saito
２．発表標題 Anaphor Binding and A-Movement across CPs in the Absence of Phi-feature Agreement
３．学会等名 The Korean Generative Grammar Circle 2018 Winter Workshop（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 斎藤　衛
２．発表標題 フェイズと転送領域ー照応形束縛とA移動の局所性からの考察
３．学会等名 慶應言語学コロキアム（慶應義塾大学言語文化研究所）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mamoru Saito
２．発表標題 The Theta-Criterion Reconsidered: Argument Doubling in Japanese
３．学会等名 Workshop: Clausal and Nominal Complements in Monolingual and Bilingual Grammars (U. of Geneva)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計4件

１．著者名 斎藤　衛、高橋大厚、瀧田健介、高橋真彦、村杉恵子、高野祐二、奥 聡、藤井友比呂、杉崎鉱司、越智正男、猿渡翌加、岸本秀樹、多田浩章、和泉 悠、船越健志、坂本祐太、齋藤広明、宮本陽一、林晋太郎	４．発行年 2020年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 約350 pp.（担当部分：2-18）
３．書名 日本語研究から生成文法理論へ（2020年6月刊行予定）	

１．著者名 Norbert Hornstein, Howard Lasnik, Pritty Patel-Grosz, Charles Yang, Noam Chomsky, David Adger, Robert C. Berwick, Jon Sprouse, Jeffrey Lidz, Heidi Harley, Mamoru Saito, Gillian Ramchand, Bronwyn Moore Bjorkman, Henk C. van Riemsdijk, Paul M. Pietroski, Omer Preminger, Mark Aronoff, Artemis Alexiadou, 他3名	４．発行年 2018年
２．出版社 De Gruyter Mouton	５．総ページ数 460 pp.（担当部分：255-282）
３．書名 Syntactic Structures after 60 Years: The Impact of Chomskyan Revolution in Linguistics	

１．著者名 Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, Hisashi Noda, Susumu Kuno, Seizi Iwata, Heiko Narrog, Nobuko Hasegawa, Tomoko Ishizuka, Hideki Kishimoto, Yoshihisa Kitagawa, Masatoshi Koizumi, Yoichi Miyamoto, Nobuaki Nishioka, Masao Ochi, Mamoru Saito, Natsuko Tsujimura, Akira Watanabe, Noriko Yoshimura, 他5名	４．発行年 2017年
２．出版社 De Gruyter Mouton	５．総ページ数 852 pp.（担当部分：701-750）
３．書名 Handbook of Japanese Syntax	

１．著者名 村杉恵子、斎藤 衛、宮本陽一、瀧田健介、藤井友比呂、岸本秀樹、越智正男、高橋大厚、杉崎鉱司、高野祐二	４．発行年 2016年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 496 pp.（担当部分： 38-70，408-443（瀧田健介と共著）
３．書名 日本語文法ハンドブックー言語理論と言語獲得の観点から	

〔産業財産権〕

〔その他〕

南山大学言語学研究センター、研究員紹介
http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/LINGUISTICS/staff/index.html
南山大学言語学研究センター
http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/LINGUISTICS/index.html
南山大学言語学研究センター／研究プロジェクト
http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/LINGUISTICS/project/index.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考